

樋口一葉著「闇桜・うもれ木 他二篇」岩波文庫、岩波書店 1939 年 5 月 2 日刊を読む

闇桜(上)

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅
 一木に兩家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくな
 りて相續は良之助廿二の若者何某學校の通學生とかや中村のかたには娘只一人男子もあり
 たれど早世しての一粒ものとして寵愛はいとゞ手のうちの玉かざしの花に吹かぬ風まづいと
 ひて願ふはあし田鶴の齡ながゝれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ梅檀の
 二葉三ツ四ツより行末さぞと世の人のほめものにせし姿の花は雨さそふ彌生の山ほころび
 初めしつばみに眺めそはりて盛りはいつとまつの葉ごしの月いざよふといふも可愛らしき
 十六歳の高島田にかくるやさしきなまこ絞りくれないは園生に植てもかくれなきものの中村
 のお嬢さんとあらぬ人にまでうはさゝるゝ美人もうるさきものぞかしさても習慣こそは
 可笑しけれ北風の空にいかのぼりうならせて電信の柱邪魔くさかりし昔しは我も昔と思
 へど良之助お千代に向ふときはありし雛遊びの心あらたまらず改まりし姿かたち氣にと
 めんとせねばとまりもせで良さん千代ちやんと他愛もなき談笑に果ては引き出す喧嘩の
 糸口最早来玉ふな何しに來んお前様こそこのいひじらけに見合さぬ顔も僅か二日目昨日は私
 が悪るかりし此後はあの様な我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫びら
 れて流石にをかしく解けではあらぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹といふもの味しらね
 どあらば斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夕は嬉しき夢を見たりお
 前様が學校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのりて
 西洋館へ入り給ふ所をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも曳かれはせぬかと大笑すれば美しき
 眉ひそめて氣になる事おつしやるよ今日の日曜は最早何処へもお出で遊ばすなと今の世の
 教育うけた身に似合しからぬ詞も眞實大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮も
 なくくれ竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の
 日もまだ風寒き二月半ば梅見て來んと夕暮や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。良
 さんお約束のもの忘れては否よ。ア、大丈夫忘れやアしない併しコートと何んだツけねへ。
 あれだものを出かけにもあの位願つておいたのに。さう／＼おぼえて居る八百屋お七の
 機關が見たいと云つたんだツけ。アラ否嘘ばっかり。それぢやア丹波の國から生捕つた荒熊
 でございの方か。何うでもようございますよ妾は最早歸りますから。あやまつた／＼今の
 はみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云はれる人がそんな御注文をなさう筈がな

りやうのすけ　うけたま　まゐ　なに　い　おこ
い良之助たしかに承はつて参つたものは。ようございます何も入りません。さう怒つて
はこまるけんくわ　あるく　わうらい　ひと　わら　あん　ばつ
はこまる喧嘩しながら歩行と往來の人が笑ふぢやアないか。だつてあなたが彼様なこと許
かしおつしやるんだもの。夫だからあやまつたと云ふぢやないかサア多舌て居るうちに
こま　もの　や　とほ　しま　どう　ま　さき　し
小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらマア何しませうねへ未だ先にもありますか知
ら。何だかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何處に。最早それはいひツこ
なしとゝめるも云ふも一ト筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の
おと　こと　ご　ぜ　いま　よ　あさがお　つゆ　あは　みづあめ
音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれ／＼栗の水飴めしませとゆ
るく甘くいふ隣にあつ焼の鹽せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ちゃん鳥渡
みたま　みぎ　ばんめ　あ　こうばい　こと　よねん　なが　い　うしろ　なかむら
見玉へ右から二番目のを。ハア彼の紅梅がいゝ事ねへと餘念なく眺め入りし後より。中村
さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返れば束髪の一群何と見てかおむつましいこと
ゝ無遠慮の一言たれが花の唇をもれし詞か跡は同音の笑ひ聲夜風に残して走り行くを
ち　よ　あれ　なん　がくかう　おともだち　ずあぶらんぼう　れんちう　み　おく　りやうのすけ
千代ちゃん彼は何だ學校の御朋友か随分亂暴な連中だなアとあきれて見送る良之助より
うつむ　ち　よ　はなしろ
低頭くお千代は赧然めり

P.7～9

<コメント>

明治 25 年(1892 年)、樋口一葉が 21 歳の時に古典の伝統を踏まえて書き著した最初の本格的
作品が、この「闇桜」といわれる。ゆっくりと音読すると、情景が浮かんでくる。このあと、生
活に苦しみながら「たけくらべ」「にぎりえ」「十三夜」などの素晴らしい作品を書き続け、1896
年(明治 29 年)11 月 23 日に 26 歳 6 か月で肺結核にて逝去。少し難解だが、一葉の作品に少しづ
つでもチャレンジを。リニューアル 10 周年を迎えた東京都台東区立「一葉記念館」も是非、御
訪問を。一葉理解が深まります。

— 2016 年 9 月 6 日(火) 林 明夫記 —